

第2章

地域支援活動の実際

1. 2013年度の活動実績

1) 地域支援活動の実施概要

地 域	活動内容	対 象	参加人数 (学生)	担当	実施日
霧島市	保健師研修会	保健師	24名 (10名)	服巻	6/14
伊佐市①	就学時検査の改訂・検討	臨床心理士, 保健師, 教員など	8名 (6名)	土岐	6月
那覇市	障害児保育に関する 講演会	保育士	108名 (一)	土岐	7/22
伊佐市②	年長児・年中児のための 就学に向けた講演会	支援者, 保護者	161名 (6名)	土岐	7/26
南さつま市	発達障害に関する講演会	保育士, 教員など	68名	土岐	7/29
宮古市	東北での震災被災地支援	被災者 (子ども～大人)	177名 (3名)	服巻	8/7～11
鹿児島市	ストレスマネジメント 研修会	教員	約40名 (4名)	松木	8/8・9
伊佐市③	大学院生による 就学相談活動	年長児	28名 (6名)	土岐	10/16・30
鹿児島市	思春期の子どもに関する 講演会	保護者	134名 (一)	中原	10/31
鹿児島市	発達障害に関する講演会	児童クラブ職員	294名 (3名)	小澤	11/12
鹿児島市	ショートエクササイズを 通したグループワーク	中学生	43名 (2名)	松浦 金坂	2/14
計	11回		約1,100名 (40名)		

2) 学会発表

2013年9月、横浜で開催された日本心理臨床学会第32回秋期大会にてポスター発表を行いました。

①発表演題

「地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな実践型教育プログラム」の開発（4）－MICTを活用した大学院生の実践参加とその効果－

（筆頭発表者：土岐）

②発表時のディスカッション内容（一部抜粋）

学会発表当日は、多くの参加者の関心を集め、活発な意見交換がなされました。

（1）MICTを用いた事例検討会に対する意見

（意見1）モバイルで、機材がない地域に運んでいくというのがいい。

（意見2）面白い取り組み。スカイプの使用もあるが、スカイプだと守秘義務が難しい。

【回答】MICTは暗号化したデータを送っており、守秘義務にも対応。

（2）教育に対する意見

（意見1）地域支援と学生教育が一環となっているが、難しさもあるように見える。

【回答】事前・事後学習がとても大切。今回の取り組みでは、地域での同一事例について大学院生が実際にビデオ録画で評価も行った上で、地域支援者とのシェアリングを行ったことを説明。

（意見2）教員が何を教えているのか明確にする必要がありそういう意味ではチャレンジに思える。

（意見3）大学教育と現場で求められている内容とのギャップがある。今回の取り組みは学生が安全かつ主体的に参加するための一つの方法だと感じる。

（意見4）自分が学生の時には、現場のリアルな視点に触れることがなく、イメージができなかった。現場に出て初めて知ることが多かった。



質疑応答の様子



ポスター会場にて
プロジェクトスタッフと

3) 学術論文

2013年度の鹿児島大学心理臨床相談室紀要に、2012年度の実績である、MICTを活用した地域での事例検討会への院生の参加体験について分析、検討した論文が掲載されました。

- 川口智美・土岐篤史・上原美穂（2013）．伊佐市における地域支援活動への大学院生の参加プロセスからの考察．鹿児島大学心理臨床相談室紀要，第9号，p5-12.

2. 各地域における支援活動（特色ある主な活動について）

1) 伊佐市における支援活動（土岐）

伊佐市での支援活動では、プロジェクトリーダーである土岐が、数年に渡り発達支援の実践と研究を行ってきたことがベースとなっています。今年度は、発達支援の講演会ならびに市教育委員会と連携した就学相談会を実施しました。特色は、本研究科修了生である臨床心理士のサポートを受けて、支援計画の段階から院生が参画している点にあります。

①伊佐市講演会

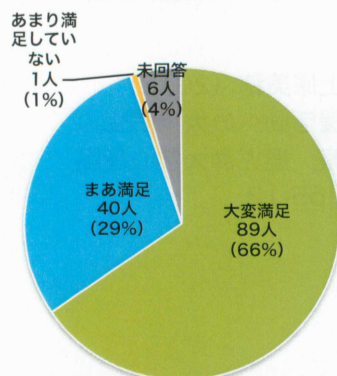
伊佐市は、スムーズな就学を進めるために、「就学を考える会」を毎年開催して、幼保小の連携を強化すると共に、年中児・年長児の保護者対象に就学のための情報提供を行っています。本研究科は、昨年度に引き続いて土岐が講師をお引き受けしました。



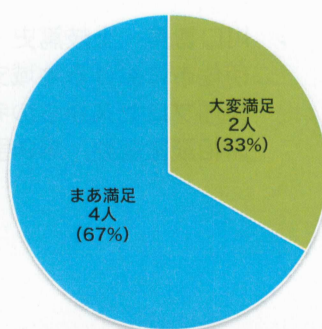
保護者と支援者の熱気に支えられた講演会

講演内容は、就学に際して知っておくべき基本的事項、発達の課題、生活習慣の自立についてでした。その後の就学相談会につながりやすいよう、気になる様子や行動も紹介しました。就学相談会に参加する学生も講演準備から参加しました。

講演会の満足度（参加者）



支援活動参加に対する満足度（学生）



②就学相談のための簡易発達検査の作成

療育が充実する伊佐市においても、特徴が目立ちにくい学童期は支援が受けにくい現実があります。逆に、幼児期に特徴が目立たなくても、学童期に支援が必要な子ども達もいます。そこで、伊佐市教育委員会と協力して、新しい就学時健診をつくることになりました。健診で一人にかけられる時間はわずかですので、最新の知見に基づく確かな発達評価が求められるわけです。

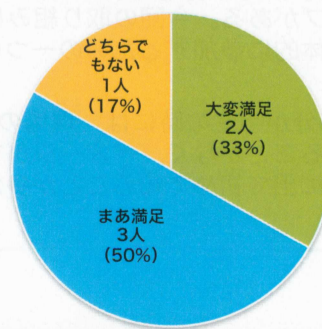
修了生の臨床心理士が所属するトータルサポートセンターと共に発達検査項目を厳選し、簡易発達検査実施マニュアルを作成しました。修了生と現役院生との膝をつき合わせての作業でした。院生は、健診の意義や目的から理解する必要があったので、事前学習を通じて基礎的事項から徹底的に指導しました。



気心の知れた同士、疑問や意見を遠慮なく交える

実施マニュアルは、現場の面接者が実際に実施できるまでブラッシュアップが必要です。模擬実施を何度も繰り返し、不要な検査項目を削り、マニュアルの表現を改めるなど、実施可能な段階まで練り直す過程も大切な学びです。

支援活動参加に対する満足度（学生）



第2章 地域支援活動の実際

③就学時健診、知能検査

新しい簡易発達検査を作成した後に、伊佐市教育委員会が就学時健診に向けての体制を整備しました。

今回は初の試みですので、全体研修を行うことになりました。研修を行ってみて、いくつかの疑問点が生じたので、細かい修正を行い、簡易発達検査はようやく完成です。

10月に実施した就学時健診では、“今まで以上に子どもの様子が見えた”“指示を実行する力が子どもによって異なることがわかった”“自分たちの学校に就学する子ども達を担当したい”と、現場の先生方からも肯定的かつ積極的な意見や感想をいただきました。

11月には、希望があった12組の親子対象に就学相談会が予定されました。相談会の事前に、院生が協力して田中ビネー式知能検査を実施しました。

実施未経験の院生もいましたので、事前学習として、基礎的講義、ビデオ学習、模擬演習を行い、実施時には1・2年生で2人1組となり、臨床心理士のスーパーヴィジョンを受けて、熱心に取り組みました。



知能検査の事前ビデオ学習
(教員・スタッフによる指導)

④就学相談会

大学院生が結果をまとめたデータを元に大口病院の塩屋友美氏（臨床心理士）と土岐が就学相談を行いました。

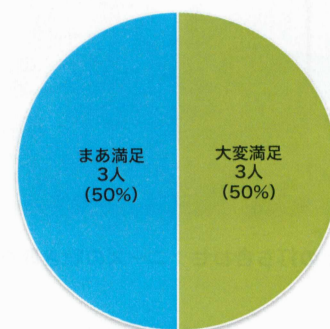
就学相談には、地域支援スタッフの川口と江口、2年生が陪席を行い、主に子どもの対応に当たりました。予定した親子は全員参加でした。

各状況は異なりますが、子どもに関する生活上の心配や悩みは保護者共通です。より良い就学のあり方を探る時間でした。安心して相談が進むよう、みんなで一丸となりました。

院生は、実際の現場で直ちに求められる、発達検査のまとめ方、伝え方、相談の進め方など、臨床実践を目の当たりに学ぶことができました。

事後活動は、就学相談事例の検討を全体で行い、発達検査と発達相談のあり方について理解を深めました。今回の活動を通じて、地域支援と実践教育の新たな形式が模索できたと考えます。

支援活動参加に対する満足度（学生）



学生による田中ビネー式知能検査の実施(イメージ)

2) 霧島市における支援活動（服巻）

①活動の概要

2013年度は、新しい取り組みとして専門職学位課程の「発達障害者心理臨床論」の授業のなかで受講生とともに地域支援について議論し、実践を行いました。

地域における母子保健事業としては、子育て支援と発達障害児の早期発見が重要課題となり、1歳6か月ならびに3歳児健診における保健師の業務負担が多くなり、健診技術の向上が必要となってきました。そこで、霧島市から健診にかかわる保健師の意識や技術の向上のための研修の機会が欲しいという声が聞かれました。現場の保健師からは、「健診での母親との対話」に難しさを感じるというものが多くを占めていました。

こうした霧島市の要望や現場の保健師の声を授業の中で受講院生（10名）に伝え、地域支援としての取り組み内容を授業の中で院生とともに議論しました。



保健師との打ち合わせ：ニーズの聴き取り



事前学習：保健師研修についての議論

②地域支援の具体的内容

1. 健診と親子教室のつながりと健診の重要性
2. 健診に来た母親の気持ち（院生のコメント集）
3. 保健師と院生との小グループディスカッション（健診に参加した母親の気持ちを振り返って）
4. 小グループディスカッション
 - （1）保健師のこれまでの工夫
 - （2）保健師が安心して発達の偏りを伝えるには？

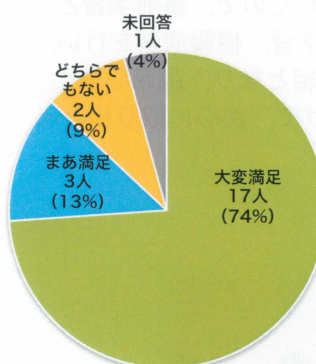


講義：
保健師の必要性和健診に来る母親
の気持ちを紹介

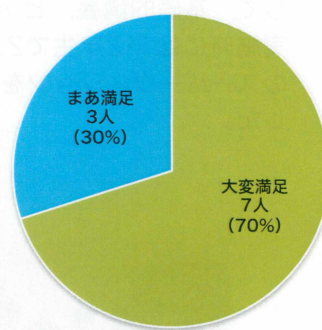


小グループ
ディスカッション：
院生が司会を務める

研修会の満足度（参加者）



支援活動参加に対する満足度（学生）



③まとめ

本支援活動においては、地域支援としては保健師が健診に来る母親の気持ちを再確認し、日常的工夫を保健師同士が共有することが重要でした。また、参加院生たちは、自ら小グループの司会をし、乳幼児健診ならびに親子教室にかかわる保健師の子ども理解と母親支援に関する具体的なスキルと考え方について学ぶ機会となりました。

第2章 地域支援活動の実際

3) 鹿児島市における支援活動

① ストレスマネジメント研修会

(担当教員：松木)

鹿児島市教育委員会主催で2013年8月9日、西郷南洲顕彰館に於いて講師として担当教員の松木、佐伯陵子氏を招いて市内小・中・高等学校の教諭及び養護教諭を対象としたストレスマネジメント教育セミナーが行われました。

本セミナーでは、専門的、かつ実践的な研修を通して、児童生徒に自分のストレスに向き合い、望ましい対処法などの技能を身につけさせるとともに、児童生徒理解のあり方やいじめ問題などの生徒指導上の諸問題に対応するための資質及び指導力の向上を図るものとして企画されました。地域支援プロジェクトの院生への教育計画では、事前学習・実施・事後学習を通して実務体験のみならず準備と体験を根付かせる教育的工夫を行うこととしています。

【具体的なプログラムの内容】

- (1) ストレスマネジメント教育の実践理論と技法（呼吸法・動作法・漸進性弛緩法を中心に）
- (2) スポーツ指導とストレスマネジメント教育（体罰を超えて競技意欲を高めるために）
- (3) ストレスマネジメント教育の応用・実践理論と技法（教育現場のニーズに応じたストレスマネジメント教育の実際）
- (4) いじめ防止・自殺予防とストレスマネジメント教育
- (5) 緊急支援におけるストレスマネジメント教育
- (6) アンガーマネジメント

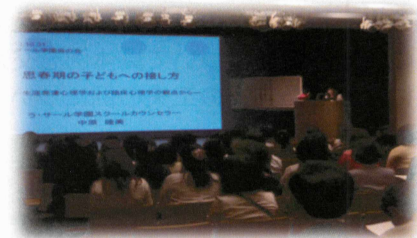
本活動では、受講された鹿児島市の教諭および養護教諭にストレスマネジメント教育の理論や実技、学校現場での児童生徒への予防的かつ対処的対応を学んでいただきました。参加院生にとっては、集団を扱うストレスマネジメント教育技法について理論・技法・実践を通して、ストレスマネジメント教育の意義の理解、そして学校教育現場に支援者として関わる際のストレスマネジメントを現場に適応できる即戦力となるための準備ができたのではないのでしょうか。

② ラ・サール学園講演会

(担当教員：中原)

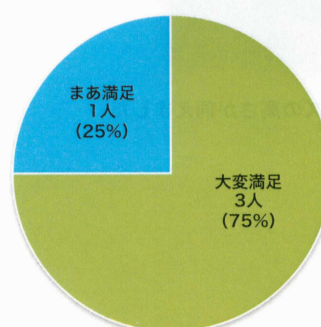
ラ・サール学園主催により、2013年10月31日、鹿児島市民文化ホールに於いてラ・サール学園母の会会員（主に生徒の保護者）134名を対象とした「思春期の子どもへの接し方—生涯発達心理学および臨床心理学の観点から—」と題した講演会が開催されました。

本講演会では、担当教員である中原が保護者に対して生徒の心理面の理解のあり方として、心身の発達、思春期特有の心性、生涯発達心理学の観点（発達の8段階ほか）及び臨床心理学の観点について解説し、思春期に特有のこころの問題や当該校に特徴的なこころの問題への理解と関わりについて保護者にわかりやすく解説しました。保護者からは、具体的な理解や対応の仕方について質疑応答が行われ、盛会のうちに終了いたしました。

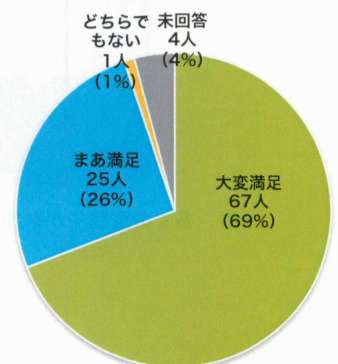


保護者のみなさんは
熱心に耳を傾けておられました

ストレスマネジメント研修
参加に対する満足度
(学生)



ラ・サール学園
講演会の満足度（参加者）



③児童クラブ研修会（担当教員：小澤）

2013年11月12日に鹿児島市子育て支援推進課が主催した児童クラブ職員対象での講演会において、「発達障害の理解と支援」というテーマで、小澤が講演を行いました。

近年、学校を中心に自閉症スペクトラム障害、注意欠陥多動性障害をはじめとした、発達障害を抱える子どもたちの増加が注目されています。

放課後の子どもたちの居場所となる児童クラブでも、学校と同様、発達障害を抱える子どもへの対応が求められており、鹿児島市の児童クラブでも障害児対応研修会が定期的に開催されています。

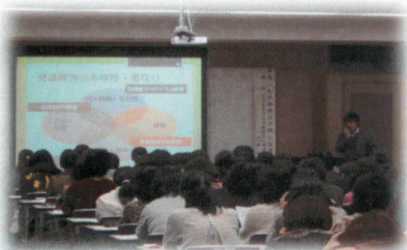
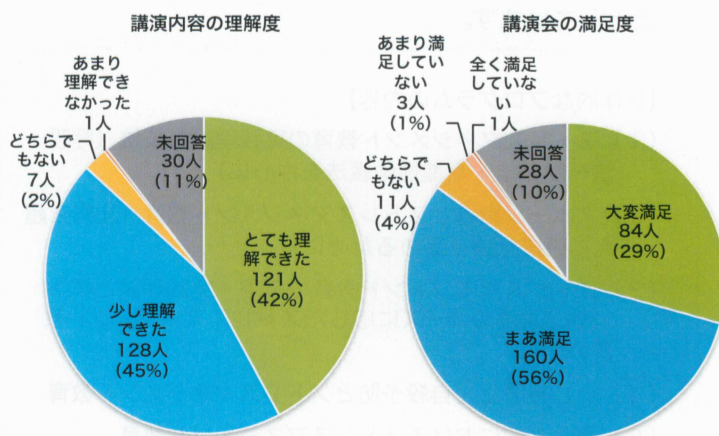
当日は鹿児島市内の児童クラブ職員、294名が参加されました。日頃から各クラブの中で、発達障害をもつ児童に対応されており、発達障害に関する理解を深めるニーズがとても高い様子でした。

講演内容は、児童期の発達の概論から始まり、発達障害の特徴と多様性についての概説を行った後、発達障害を持つ人々の見え方・聞こえ方・考え方などの認知的特性について具体例を交えて紹介し、特性に合わせた支援の工夫の例について紹介しました。

視覚素材を使った認知的特性の紹介の場面では感嘆の声が上がるなど、120分の長時間の研修時間でしたが、最後まで熱心に話を聞いている参加者の姿が見られました。

最後の質疑応答の時間では、日頃子どもたちと接している中での困難に関する質問が多く、短時間でしたが熱心なディスカッションが行われました。

研修会終了後のアンケートでは、概ね高い満足度・理解度が得られました。自由記述からは、実際の事例に則した話を聞きたいとの要望もあり、今後は事例検討も含めたより実践的な研修の展開が期待されていると考えられました。



多くの受講生が参加し、ニーズの高さが伺えました



研修会での熱心な受講生の様子

第2章 地域支援活動の実際

④吉田北中学校におけるショートエクササイズを通じたグループワーク

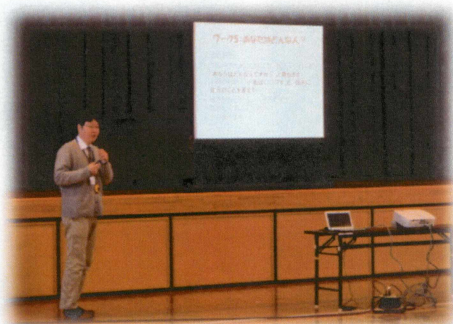
(担当教員：松浦・金坂)

2014年2月14日に、鹿児島市北部に位置する吉田北中学校において、担当教員の松浦・金坂が、生徒を対象としたグループワークを行いました。吉田北中学校は、本大学院の外部実習先として関わりを持つ実習機関のひとつですが、生徒総数が50名弱という小規模の中学校です。そういった環境の中で、生徒自身が人間関係の発展に活かせるコミュニケーション力を養うことが、学校側からのニーズとしてあがってきました。

本プロジェクトでは、担当教員の松浦・金坂がプロジェクトスタッフと協働のもと、生徒向けのグループワークのあり方や効果測定に関するデータ収集方法を詳細に検討してプログラムを立案しました。

具体的には、構成的グループエンカウターの手法を用いて、特に幼少期からの顔見知りと共に過ごすことによる人間関係の固定化に対して、友人の新たな一面を発見できるような「他者発見」のワークを中心に実施しました。

生徒たちは生き生きと活動に参加し、ワーク後には「とても楽しかった」「ふだん何気なく話している人の意外な一面を知ることができた」などの声が聞かれました。



中学校でのグループワーク実施時の様子

4) 南さつま市における支援活動（土岐）

南さつま市では、地域で療育活動を行っているNPOのHAS発達支援センターと協力して、子どもの発達に関する啓発活動を行っています。

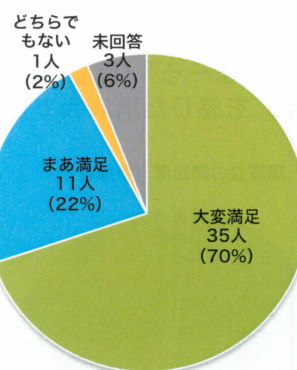
2012年度は、HAS発達支援センターに通う保護者会の要請を受け、保護者と支援者の合同参加による幼児期の発達に関する研修会を行いました。

今年度は、就学後の問題を少しでも解消しようという目的から、7月29日、保育士、幼稚園教諭、学校教諭などの支援職を対象にして、学童期の発達に関する講演会を開催し、土岐が講師を務めました。

講演では、発達障害の基本的説明から始まり、療育における発達課題、そして、学童期における発達課題を具体的事例を交えながら説明しました。学童期の支援は、障害特性は一見わかり辛くなっていることがあり、普段から特性がどのように日常に現れるかを意識することが大切です。

南さつま市では学童期の事例を中心とした連携が行われているためか、小・中学校教諭が比較的多く参加されている印象を受けました。また、民間事業所の主催であったため、日置市、指宿市、南九州市、枕崎市といった隣接の市町村からの参加もしやすかったように思います。

講演会の満足度（参加者）



幼児期においては地域療育が整備されつつある現状で、今後は学童期の支援がクローズアップされていくでしょう。

第2章 地域支援活動の実際

5) 那覇市における支援活動（土岐）

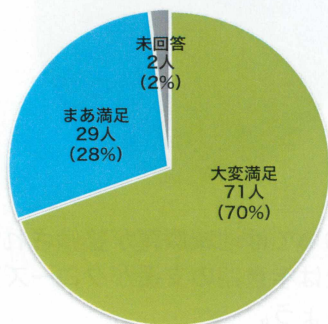
本プロジェクトの講演会は県内各地で好評を得ていますが、本年度は県外においても活動を実施できました。那覇市は乳幼児の発達支援に力を入れており、市直営の那覇市療育センターが基幹的役割を果たしています。近年は、発達障害を含む障害をもった子どもたちが増加しており、障害児保育のニーズも高まっています。

本年度の6月、那覇市療育センターが主催した保育士対象の講演会で、土岐が障害児保育と医療をテーマとした話をする機会がありました。平日の夕方という時間でしたが、専門研修でありながら参加者は100名を超え、本分野の関心の高さを示していました。会場の関係で、残念ながらお断りした方々も多数でした。そこで、今回は本研究科の後援で、第2回目の講演会を行うことになりました。前回参加できなかった、さらに100名超の対象に支援の提供を行うという、私たちにとっても貴重な経験でした。

講演内容は、障害児保育の定義や施策の流れから始まり、各障害別の医療と保育における課題や最新のアプローチについて、架空事例を交えながらお話ししました。現場でよく見られる事例をあげたので、うなづきながら聞く方、熱心にメモを取られる方など、真剣さがひしひしと伝わってきました。

障害児保育は、障害理解だけではなく、子どもの発達理解、そして、保護者の立場や現状をくみ取り、気持ちに寄りそった支援が必要となります。経験の有無を問わず、“初期支援”アプローチの基本を知れば、よりよい支援が可能です。会場の熱気に支えられ、“ゆいまーる”（協働意識を意味する沖縄のことばです）を感じた講演会でした。

講演会の満足度（参加者）



6) 宮古市における支援活動（服巻）

2011年3月11日の東日本大震災で、岩手県宮古市は、最大遡上30mを超す津波被害を受けました。福岡女学院大学の犬野教授・奇教授が中心となり、宮古市へは2011年8月から年2回、8月、3月に子どもたちや大人・高齢者への心理支援活動を行っています。今年で5回目となるこの活動に、2013年8月7日～11日の日程で院生3名と服巻が参加しました。

宮古市では田老地区、その他数か所の仮設住宅、みなし仮設に入居している成人・高齢者を対象に、「リラクセーション教室」としてサート（動作法）を適用しました。リラクセーションの中に生きる喜びを感じてもらえる機会となったようです。

崎山地区仮設住宅集会所では、子どもたちに対して「あそぶ寺子屋」と題した工作や集団あそびを行いました。子どもたちは、あそびを通して気持ちを表現することもあり、ケア的かわり方で変化し、気持ちが晴れていくのが感じられました。

子どもから高齢者まで、年2回のこの活動を楽しみにして頂いており、私たち支援者も同じ顔ぶれで支援しているので、顔なじみとして九州から来る親戚のような関係になっています。

長期的かつ継続的な心理支援はこれからの課題です。私たちも、地域支援活動を通じて地域の方々の暮らしや子どもたちの成長を見守れたらと思っています。



「希望の灯」に祈りをささげました
（子どもたちには“くまもん”が大人気でした）